芦田恵之助の南洋群島国語読本

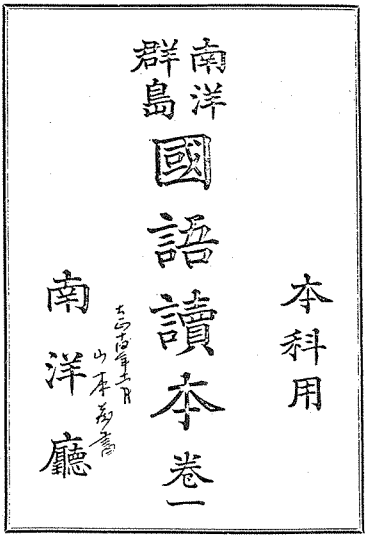
福　田　須美子

はじめに

1924（大13）年，芦田恵之助[1]は，南洋群島に降り立った時，ハイビスカスの花の紅と，青い海，澄みきった水に目を奪われた。ここから出発しようと，芦田は読本の第一ページをハイビスカスの「ハナ」で飾り，次に限りなく続く「ウミ」と「ナミ」で島民の身の周りにある自然の美しさを称えた。

島民と接して，島民の物を超越した心の豊かさを発見し，これを南洋読本編纂の「中心思想」[2]に据えたいと考えた。自然の美しさ，虚心坦懐な島民の態度，心の広さ，豊かさを目の辺りにして，芦田自身心打たれるとともに，島民に「自分の美質を知って，それを育てること」[3]を願って南洋読本をまとめてみたいと思ったという。こうして出来上がったのが，南洋群島国語読本，本科用巻一（一年生用），巻二（二年生用），巻三（三年生用）（1925．2）補習科用巻一，巻二（1926．3）である。編纂の趣旨を「趣意書」に次のように唱っている。その主なねらいを見てみよう。

> 南洋群島国語読本を編纂するについての根本方針は，一に国語を学習することによつて，島民の幸福を増進することを第一義と致しました。まづ島民の生活に文化の意義を発見することから，出発して，内地の文化，欧米諸国の文化等を想像の上に学ばせるやうに工夫致しました。しかしその中心の思想としては，人間はその天賦の理性を凝視して，誠意向上をはかる所に，応分の創造が存することを主旨としました。人間を教育するには，外より教へこむよりも内より，萌え出づるを導くのが，真の意義であるとの編者の所信によつたものです。



本稿では，執筆者である芦田恵之助のねらいが，南洋群島国語読本の中にいかに生かされ，教材化されていったかについての素描を試みたい。

Ⅰ　芦田南洋群島国語読本の背景

芦田が編纂に従事した1925～26年の南洋群島では，1914年日本海軍による占領後，1918年民政部設置を経て，1922年これに代わり南洋庁が設立され，島民学校の名称も南洋庁公学校（修業年限３年，補習科２年）と改称，サイパン，ヤップ，パラオ，トラック，ポナペ，ヤルートの各諸島に於て，組織的な植民地教育が展開されようとしていた。

国語読本の編纂については，

(Ⅰ)　第一次編集　1917.3　巻一，巻二　1919.2　巻三，巻四

臨時南洋防備隊司令部

編纂委員　杉田次平（トラック小学校長）

(Ⅱ)　第二次編纂　1925.2　本科用巻一，巻二，巻三

1926.3　補習科用巻一，巻二

南洋庁

編纂者　芦田恵之助

修正　1927.4　コロール島在住学校職員
1927.12 印刷完成

(Ⅲ)　第三次編纂　1932.3　本科用三巻を六巻に
1933.3　補習科用二巻を四巻に
南洋庁
修正担当者　岩崎俊晴（マキヨク公学校長）

(Ⅳ)　第四次編纂　1933.8　1937年完了
南洋庁
編纂担当者　梅津隼人（元和歌山県立中学校長）

の歴史があり，芦田の第二次編纂は，杉田次平の手になる第一次編纂の国語読本が払底したことにより，急遽持ち上った請け負い事業であった。朝鮮『普通学校国語読本』の編纂を終えて，朝鮮から戻ったばかりのところへ，文部省内の知人[5]を通じて話が持ち込まれる。

文部省及び南洋庁からの条件は，

一、君（芦田）に是非お願い申したい
二、画料，印刷は南洋庁でやるが，その指図と校正は君（芦田）に願いたい
三、見積り書を出してほしい
四、一度南洋を旅行して，風物の相違，教育状況を視察して，編纂に着手願いたい

の五項目のみであり，内容については芦田に全部任せるとのことであったという[6]。

この意味で，南洋群島国語読本は，芦田の著書であるとともに，教科書としては，特殊な背景を持つ読本であるといえる。

しかも，「南洋庁公学校規則」に沿って，教科編成が修身，国語，美術，図画，唱歌，体操，手工，農業及び家事の中の，すなわち，地理，歴史，理科抜きでの国語であることから，「算数・手工・図画・唱歌以外の教科は読本にまとめたい」[7]との南洋庁の意向を受けていたことも，この読本の性格を考える上で踏まえておかねばならない事実である。

「南洋庁公学校規則」（1922．4 南洋庁令第12号[8]）

第六条　公学校ノ教科目ハ修身，国語，算術，図画，唱歌，体操，手工，

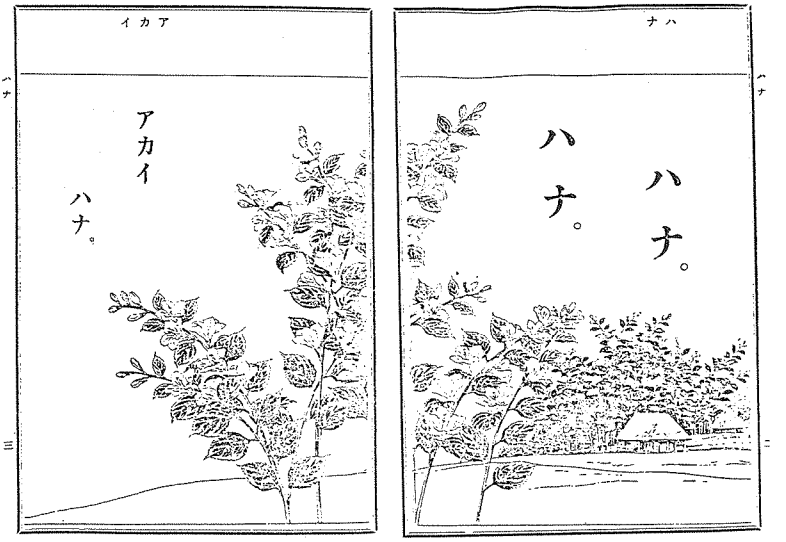
農業及家事トス　但シ農業ハ男児ニ之ヲ課シ家事ハ女児ニ之ヲ課スルモノトス　土地ノ情況ニ依リ前項ノ教科目中修身，国語，算術ノ外他ノ教科目ヲ減シ又ハ必要ナル教科目ヲ加フルコトヲ得　前項ニ依リ教科目ヲ加除セントスルトキハ支庁長ハ南洋庁長官ノ認可ヲ受クヘシ

第十一条　国語ハ普通ノ言語，日常須知ノ文字及平易ナル口語文ヲ教ヘ其ノ応用ヲ自在ナラシメ正確ニ思想ヲ発表スルノ能ヲ養ヒ特ニ言語ノ練習ヲ主トシテ日常国語ヲ使用スルニ支障ナキ程度ニ至ラシメ兼テ智徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス　国語ハ初ハ主トシテ近易ナル話シ方ヲ授ケ発音ヲ正シ片仮名ノ読ミ方，書キ方，綴リ方ヲ知ラシメ漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及簡易ナル口語文ニ及ホシ特ニ普通用語ノ練達ニ力ムヘシ　読ミ方ハ発音語調ヲ正確流暢ナラシメ語句ノ意義ヲ明瞭ニシ且其ノ用法ニ習熟セシメムコトヲ力ムヘシ

書キ方ハ実用ヲ旨トシ漢字ノ書体ハ楷書トシ仮名ハ片仮名及平仮名トシ其ノ習熟ニ力ムヘシ　綴リ方ハ読ミ方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項及児童ノ見聞シタル事項並処世ニ必須ナル事項ヲ口語体ニテ記述セシメ其ノ行文ハ平易ニシテ趣旨明瞭ナラムコトヲ力ムヘシ

第一次編纂国語読本は未見であるが，その趣旨を，「趣意書[9]」により窺うと，

一、国民思想涵養ノ基礎トシテ，教育ヲ授クルノ第一歩ニ，児童ヲシテ，先以テ国民性ヲ感知セシムヘク，巻一開巻劈頭第一ニ我カ国旗を提示



シ，児童ノ心界ニ深ク我国家ナル印象ヲ与ヘ，世界無比ノ皇統連綿タル国体ニシテ剛健慈仁ナル大日本帝国タルコトヲ旭日旗ノ下ニ統合シテ，以テ等シク日本人トシテ，此ノ旭日旗ノ下ニ一員タルノ念ヲ起サシム

一、第三課ニ人ヲ提示シ，第五課ニ家ヲ，第十八課ニ御紋章ヲ，第三十二課ニ軍艦ヲ，第三十三課ニ軍人ヲ提示シタルモ，即チ，陛下，国家，国旗，人，家等我国家成立ノ所以ヲ知悉セシメ，何レモ，国家ノ発展ガ，陛下ノ下ニ之等忠勇ナル臣民アリテ，然ル所以ヲ感知セシメ，自己ト比較シテ，自覚発奮シテ信服敬慕，日本人タラントスルノ念ヲ起サシムヘク，強キ暗示ヲ与ヘントス

となっており，軍国主義的同化政策が前面に押し出されている点は，芦田読本と趣きを異にするところである。もちろん植民地政策の一環としての教科書編纂であることは共通するところであるが，第一次編纂と芦田の第二次編纂ではその姿勢に若干の相違があることも見ておかねばならない。

芦田は朝鮮『普通学校国語読本』編纂の際にも，「一視同仁」的同化政策を露骨に読本に持ち込むことには反対であった。こうした姿勢は南洋読本にも基本的には引き継がれ，芦田自身は自分の読本を「外より教へこむよりも，内より萌え出づるを導く」，いわば内発的欲求に支えられた形で学習されることを願っていた。

Ⅱ 『南洋群島國語讀本』

(1) イメージ

子どもの持つイメージの世界を大切にした芦田は，国定第三期国語いわゆる「ハナハト」読本に於てはサクラ，朝鮮国語読本に於てはモモというように，実際に身の周りにある馴染みの花ハイビスカスによって，読本そのものを子どもの心に馴染ませたいと願った。「サクラノハナ」から「モモノハナ」そして「ハイビスカスノハナ」への転換に最初の大きな効果を狙っている。

次にどこまでも続く海，第一課「ウミ」に芦田は自分自身が南洋の海を初めて見た時の感動を託したのである。

六十尋もあるという海底がすつきり見える水の清澄さ，よいなあと思いました。その底に泳いでいる美しい色の魚族，餌をなげたら，直ぐにも釣れそうなのを見て，私はながめているだけで，飽くことを知りませんでし

た[10]。

島の子どもたちの周辺にある自然，そして動物「イヌ」「ウシ」「ベニスズメ」「ネズミ」「ブタ」「ヒヨコ」を取り挙げ，次に子どもたちの遊び「シャボンダマ」「マリナゲ」を通じて子どもの生活を描いている。躍動感ある挿画が紙面を楽しいものにしている。

読本を先ず手にした時の児童の様子を思い浮かべながら，芦田は自分自身が体験した楽しい印象，嬉しい感動を伝えることを，挿画に期待した。

(2) 表記

生きた国語を重視した芦田は，島民の現状に即して，表記法に工夫を凝らしている。

本科用巻一，巻二は片仮名，巻二の後半から漢字，巻三から平仮名を加え，巻三を終了すれば新聞・雑誌くらいは読めるように編成した。第一次編纂の読本が全部片仮名と漢字だけで成っているのを見て，「島民が実用といふ立場からうまく疑をさしはさまなかつた」[11]と言い，又漢字の取捨選択についても，「島民の常に目に映じさうな漢字，日常生活にしばしば必要としさうな文字」[12]に「新聞雑誌と同じやうに振仮名をつけておきました」[13]と，言語の実用性を重視した。

文章は全部に口語体の敬体を用いている。「読本に習熟することが，ただちに会話の練習になるやうに工夫し」[14]そして文体に「児童に適する簡潔――大人から見れば冗漫な所がありますが――親しみやすい簡潔」[15]を採り入れた。子どもの気持ちになって，「親しみやすい」，「生きた」日常語としての国語の普及を念頭に置いている。

表音についても，わかりやすさ，学習を容易にする点から，仮名遣いは全部表音表現を採り入れた。

> 仮名遣は文部省の新定仮名遣の上を一歩進めて，全部表音的にしました。「わ」と発音する場合はすべて「わ」，「え」と発音する場合はすべて「え」を用ゐました。たゞ「お」と「を」は双方命脈がありさうですから，目的格をあらはす「を」だけは「を」を用ゐ，他は全部「お」を用ゐました。[16]

「親しみやすさ」は挿画の採択の際にも重視された点であったが，単語，文章，ストーリーの選定についても，新素材の導入の場面では特に注意が払われた。

巻三の平仮名導入では，「ウミ」の楽しさを唱ったリズミカルな詩が使われている。「いつもおもしろい浜辺に，親しいあそび仲間とたわむれて暮す児童は幸福です[17]」という選者の気持ちをそのまま伝える，語感のいい詩が，平仮名と最初にぶつかる時の摩擦を少なくしてくれそうである。

音を重視し，耳に親しんでから文字を学習させる教授法を勧めている。「国語は目よりするのも大切ですが，耳よりすることが更に大切です[18]」と説き，「聞く」次に「話す」，「読む」，「書く」の順に展開することが「国語に親しむ」ことに通じると教えている。

(3) 児童中心主義

児童にとって親しみやすい方法で，親しみやすい内容の教材を創る。こうした素材は，児童の生活の中にあると芦田は考えていた。

> 児童の日常生活から多くの材料を取りました。これは国語を自習する天地を，その生活の範囲に開かうためです。生活範囲からとつた教材は，一読その意義が明瞭で，取扱いが容易であるから，極めて軽視するものがありますが，各課に所見を附記しておいたやうに，これによつて児童の目を開くことが肝要です。こゝから出発しなければ，国語教授はいふまでもなく，一切の教授は，教材によつて蹉跌するかと思ひます。[19]

「児童の目を開く」とは，児童自身が「自分を発見する」，芦田の言葉を借りるなら「自己を読む」ということである。児童の日常，まさに生きた素材を教材化し，そこに自分を発見する。故にその場面は，自ずと生き生きとした動的な場面となってくる。

場面に登場する動物達も，擬人化され，子どもになり代わっている。あるいは子どもの友達として子どもの世界を豊かにしている。巻一のトンボ，メンドリ，コネコ，コウシ，コブタから，徐々に目は家庭，学校に向けられ，巻三では社会・国家へと素材が求められ抽象度が高まってゆく。

> 一年は国語を学ぶ端緒，二年は自分の生活を主とした学習，三年はこれによつて，人生の一端をうかゞわせようといふのです。[20]

児童の発達観を基礎に教材化に取り組んでいるが，この読本は，修身・地理・歴史・理科内容を包含することを求められていたことや，対象が小学生といっても，学年がルーズで年齢に開きがあるケースが多

かったこと，また3年間の課程である程度まで新聞雑誌が読め，日常会話が習得できるとの目標を持っていたことなどから，速修的な粗略さを免れない。

(4) 美しい心

素材拾集の過程で，島民から，教わったことについて芦田は次のように記している。

「あなたは槍投げが大そうお上手だそうですが，いつけいこしましたか」「小さい時から，いつでも」「動いている物と，じつとしている物とでは，どちらが投げよいですか」「同じです」「なぜでしよう」「動いている物は動いているように，じつとしているものはじつとしているように投げるから同じです」私はまさに至人の言として，おのずから頭の下るのをどうすることも出来ませんでした。「槍投げの先生はありますか」「ありません」私はこの半開人の生活に対する態度が，実にすばらしいと思いました。[21]

こうした島民の純心さに触れた時の感動，折り折りに接する島民の利害得失を超越した物の考え方への讃美を読本に生かしている。

例えば巻三の「美しい心」には，芦田が島の日本人から聞いた，生きた体験談をもとにストーリーを展開している。

「しぬとかくごをしたいのちわたすかるし，しらない人からわしんせつにされるので，しみじみうれしく思いました。島民の美しい心わ，いつになつても，私わわすれることが出来ません」(巻三)

「純心素朴の島の児童に内省の道を与へたら，すべて美しい心の人ではあるまいかと思ひます[22]」と述べ，芦田は「内省」の道を開くことで，国語の教材を「修身」教材としても取り扱えるように配慮している。

「美しさ」はまた普遍的なものであるが故に，先に朝鮮で拾集し，朝鮮『普通学校国語読本』に採り挙げた朝鮮民話「水ノ中ノタマ」(巻二)——紛争の種になる玉を水に沈めて平和を守ろうとする話——から朝鮮人の心を読ませることで，朝鮮人の美しさ，そしてその共通性を学ばせ，ひいては日本人の精神へと敷衍してゆく。

(5) 描かれた日本

芦田は，朝鮮『普通学校国語読本』編纂の際に，日本的素材の取り扱

いには特に神経を使った。朝鮮民族の誇りを傷つけないようにすることが読本成功の第一の鍵だと信じていたからである。この姿勢は，軍国主義的色彩を前面に出さないということにおいて，『南洋群島国語読本』にも引き継がれたといえるが，今回は，「日本」を描くことについては積極的であったと思われる。

> 編者はかつて朝鮮總督府に於て，普通学校国語読本を編纂し，朝鮮民族の幸福を増進することを主義として従事しました。しかしながら朝鮮はかつては先進国であり，独立国として歴史を有する国であり，千七百万といふ大集団の民族である等，種々なる事情から，材料の選択について苦心する所が多かつたのですが，南洋群島の読本はこの点に於て甚だ心安さを感じました。勿論各群島には幾多の酋長があり，それぞれに文化の萌芽を持つてゐますが，朝鮮のやうに一独立国としての自覚がありません。ことに近年群島間の交通が自由になりましては，どうしても共通語を持たなければならない事情を生じ，さしづめ国語を以てこれにあたるのが，目下の場合最も便利な事です。この要求に乗じて国語を扶植することは，順風に帆をまくの類です。編者はこの点からこの読本が必ず島民から歓迎されるだらうといふ予感を持つて筆をとりました。[23]

共通語を創ることの必要，それに「日本語」を当てることの便利さから「日本」が島民に好意的に迎えられたとの芦田の理解は，日本の同化政策を推進するものとなる。

「オニンギョウ」(巻一)，「トシノクレト，トシノハジメ」(巻一)「イロハガルタ」(巻二) による日本の風物，風俗の紹介，民話「モモタロウ」(巻一)，「ウラシマタロウ」(巻二)「ハゴロモ」(巻二) や史話「セッシュウ」(巻二)「オウギノマト」(巻二) を通じて日本文化を受容させる意図を打ち出す。

「モモタロウ」

> 「モモタロウ」の話を何故南洋の児童に教へるかといふことについては，多少意見があります。第一南洋全島を通じて童話伝説様の乏しいことが原因でもありますが，さらに一面からは，かうして日本の委任統治下にある南洋島民の幸福は，日本人の持つ感情に，少なくとも同化の傾向を持つことが第一だと思ひます。その方便として採つたのです。教育者は常にこの心掛がなくてはなりません。[24]

童話の世界で描かれてた日本は，万世一系の皇室の理解へと導かれ，

「キュウジョウ」(巻二)「皇太子殿下ノ御成婚」(巻二)「鏡ト玉ト剣」(巻三)「仁徳天皇」(巻三),「紀元節」(巻三) という皇室教材となってゆく。

「キュウジョウ」

まづ天皇皇后両陛下のまします所を教へ，宮城に対して国民の持つてゐる尊敬をしらせ，年とともにその風に化せしむるやうに仕向けなければなりません[25]。

「皇太子殿下ノ御成婚」

この課を取扱つては，皇室の御慶事とか，この頃も皇孫殿下御誕生に対して，国民こぞつて熱烈に奉祝するこの事実を知らせなければなりません[26]。

「鏡ト玉ト剣」

この課を取扱へば，日本神代のあらまし，かつ皇室の御祖先のことも，大凡うかゞはれます。模造の鏡と剣に――崇神天皇の御代――玉を添へて，皇位継承の御印とせられた事など話せば，国柄のあらましもわかるわけです。この教材を歴史として説くと共に，国民精神のよつて起る所にまで説き及ぼしたいと思ひます。鏡の明かさ，剣の鋭さ，玉の温さが，日本民族の精神かと思ひます[27]。

「仁徳天皇」

仁徳天皇は常に人民のことをお心にかけさせられて，溝をほつたり，水ぬきを作つたりして，色々百姓のことをお世話下さいました。はせあつまつた老若男女，夜を日についで一生懸命に働きましたから，まもなく新しい御殿が出来ました。天皇様のこゝにおうつりになりました御満足。その御満足を拝するについての人民の満足。今からそれを想像するさへ，涙のしみでるやうな美しさです。これが日本の国柄のうつくしい所です[28]。

「紀元節」

この課を取扱つては，紀元節といふ児童の生活中にある事実に，この史実を添へて，日本建国の次第，及び日本の国柄を十分に知らせなければなりません[29]。

これら,『南洋群島国語読本教授書』に著わされた編者芦田の皇室教材に対する姿勢を巻ごとに追ってみると，まず，天皇を国民に敬愛される存在として描き出すこと，そし天皇は慈悲深い人柄で常に国民のことを思っていること，そして「紀元節」のような日常生活の中にある事実を通して，こうしたことを教えようとしているところに特徴がある。し

かも，天皇を敬愛してやまない芦田自身の心を素直に表現しているところが大きな特色となっている。

「静かに宮城を拝すると，『何事のおはしますかは知らねども』と皇太神宮の前で，西行の詠んだといふ歌のごとく，『かたじけなきに涙こぼるゝ』感が胸一ぱいになります」[30] という編者の気持ちは，極く自然に子どもの口から次のような言葉となって出てくる。

「私ラノトバスフウセンガ，ミンナソロツテ東宮ノ御所ニオチルトウレシイナ。アカイマツカナフウセンガ，コノオイワイノフウセンガ。」（巻二「皇太子殿下ノ御成婚」）

このようにして，永い歴史と文化を誇る日本が，美しい心の持ち主である代々の天皇と，天皇を敬愛してやまない国民により成り立っているところに今日の繁栄があるということが島民の意識に浸透し，日本文化が受容されてゆくことになる。

おわりに

読本を，「自己を読む」教材であると考えていた芦田は，学習の過程で「自己を発見」できるよう，その編纂に心を砕いた。

「ノンディレクティヴ・カウンセリング」ともいわれる岡田式静坐法により「自己の発見」に導かれた[31] という芦田は，その読本編纂に「ノンディレクティヴ」メソッドを根付かせたともいえる。

「外より教へこむよりも，内より萌え出づるを導く」との信条は，学習が内発的な欲求に支えられて始めて成り立ちうるものであることを物語る。ここに外国人が「国語」を学ばせられることの矛盾が発生する。芦田自身は，「国語」が島民に「好感を持って迎えられた」と思っていたようであるが。

朝鮮『普通学校国語読本』編纂の際には，「歴史のやむなき」を理解させることから，一方『南洋群島国語読本』では，「共通語を持つことの便利さ」から出発している。前者では自国語を奪うことへの配慮から，読本には「侵略者」日本はあまり顔を覗かせない。南洋においては，むしろ「援助者」のような気軽さで編纂に従事している。南洋群島は，「日本民族が南方に発展す足溜の地として，実に意義の深い所です。その島民が国語を解し，日本民族と同じ傾向を持つやうに教育を

すゝめる事は，国策としても重要なことと存じます」[32] と，『編纂趣意書』に明記しているところをみると，同化政策を進めるための読本編纂であることを自覚していたと思われる。そしてこのことが島民にも大きな利益をもたらすと信じていたのである。

ここに芦田の錯覚，『南洋群島国語読本』の矛盾があった。島民にとっての国語はあくまで母語であり，日本語は国語ではないのである。戦後，芦田は，朝鮮，南洋群島での読本編纂を次のように述懐している。

> この頃つらつら思います。併合下に於ける朝鮮の読本は，自覚ある朝鮮人が，朝鮮民族のために編纂すべきであったと思います。委任統治下に於ける南洋読本も亦，自覚ある南洋島民が編纂すべきであったと思います。よしその読本が，いかに低級のものしか出来なかったとしても，それが地から生えた読本です。朝鮮民族，南洋島民の血となり，肉となり得る読本です。私はおろかにして，当時このことに心づかず，徒らにその職をけがし，自分の是とするところに精一ぱいの労をさゝげたのは，命をうけてしたことゝはいえ，申し訳ないようにも思います。まして国語政策を内に蔵して，非民主的思想でのぞんだことは，いよいよ罪の深いことと思います。[33]

註

1） 芦田恵之助（1873～1951）兵庫県氷上郡竹田村に生まれる。16歳で簡易小学校の授業生，19歳で小学校訓導。26歳で上京，27歳，東京高師附小の訓導となる。1919年国定第三期国語読本の編修に嘱託として参与，その後1921年49歳，朝鮮総督府の依頼により『朝鮮國語讀本』を編纂，つづいて1924年南洋庁より依頼を受け『南洋群島國語讀本』を編纂，53歳で公的生活を終える。以後全国教壇行脚に出る。

2）『恵雨自伝』芦田恵之助国語教育全集25　明治図書出版　1987年　P.229

3） 同書　P.237

4）『南洋群島教育史』青史社　1982年　P.255

5） 高師附属小学校時代の教え子西川敏子さんの父親『恵雨自伝』P.225

6） 2)に同じP.225～P.226

7） 同書　P.236

8）『南洋群島島民教育概況』下　南洋経済研究所，1945年　P3

9） 4)に同じ，P.249

10） 2)に同じ，P.228

11）12）13）『南洋群島国語読本教授書』南洋庁　P.238
14）　同書　P.239
15）　同書　P.240
16）　同書　P.239
17）　同書　P.97
18）　同書　P.41
19）　同書　P.80
20）　同書　P.120
21）　2）に同じ，P.230
22）『教授書』P.98
23）　同書　P.236
24）　同書　P.39
25）　同書　P.71
26）　同書　P.73
27）　同書　P.90
28）　同書　P.96
29）　同書　P.113
30）　同書　P.71
31）　久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書　P.78
32）『教授書』　P.237
33）　2）に同じ，P.239～P.240

本稿は1987・88年度成城大学特別研究助成費を受けた共同研「アジアの教科書と日本の教科書」の第一次研究報告の一部をなすものである。

付表 『南洋群島　國語讀本』（本科用巻一～巻三）もくろく

	巻　一	巻　二	巻　三
1	（入門）ウミ	ニュウガクシキ	朝　會
2	トケイ	ワタクシノツクエニ	日　本
3	キレイナトンボ	ナミコサントーショニ	鏡ト玉ト剣
4	ナ　ミ	ヒヨコ	太郎ノ日記
5	エンソク	オヒサマノハシ	ジシヤク
6	コトトモノ	メタル	弟の体操
7	ニ　ジ	ウラシマタロウ	ペニスズメ
8	ハコノナカ	ナカヨシノシマコサン	ハタラクモノ
9	ユウガタ	ア　メ	仁徳天皇
10	ワカラナイコト	ト　ミ	な　み
11	カ　ヤ	アリノアナ	美しい
12	フ　ネ	ユビノナ	雨
13	シャボンダマ	カトハエ	南洋群島
14	マリナゲ	ダイジナコトバ	日本との交通
15	ウンドウカイ	ニ　ジ	だれにおれいをいつたらよいでしよう
16	ドウブツエン	ミギトヒダリ	奈　良
17	メンドリトヒヨコ	ハゴロモ	ヤ　ギ
18	タイソウゴッコ	山ビコ	フン水
19	コ　ネ　コ	土	かしこい子供
20	コ　ウ　シ	ポチガシニマシタ	指
21	ヒコウキ	コトリトコドモ	塩ト砂糖
22	オニンギョウ	イロハガルタ	たんじよう日
23	ツユノタマ	ヨクハタラク人	は
24	アカンボ	キュウジョウ	あつめる楽しみ
25	トシノクレトトシノハジメ	皇太子殿下ノ御成婚	紀元節
26	マクラ	キマリ	通　信
27	ブタノコ	セッシュウ	手　紙
28	ツクエノソウジ	トビウオ	東京駅
29	アリガタイ	オウギノマト	瓶と缶
30	モモタロウ	水ノ中ノタマ	天の川